

2022年度学生アンケート報告

—2022年度1年生対象「コミュニティ人間科学部学生の地域体験と知識に関するアンケート」の分析結果—

西島 央^{*}・大堀 研^{**}・鈴木 俊之^{***}・武田 美亜^{****}

1. 学生アンケート実施の経緯と目的及び学生アンケートの概要

コミュニティ人間科学部附置コミュニティ活動研究所では、学部所属学生のさまざまな活動体験や大学での学習・研究に対する意欲・関心のようなものを把握して、授業の内容・方法の改善に資することを目的に、開所初年度より、学生アンケートを実施する教育研究プロジェクトに取り組んでいる。

本報告は、2022年度に在籍している1年生を対象に実施した学生アンケートの結果をまとめたものである。西島と武田が数量データ部分の記述的整理を行い、大堀と鈴木が自由記述部分より特徴的な記述を紹介する。

1.1 学生アンケートの目的と今年度の学生アンケート実施の実状

コミュニティ活動研究所の教育研究プロジェクトの一つとして、学生対象のアンケートを実施することになった経緯は、本所報創刊号の「2019年度学生アンケート報告」（西島・大堀・伊藤 2020）に詳しいので、ここでは省略する。

本プロジェクト立案時に設定した目的は、「中長期的には、どの学年に対しても入学時と3年時または4年時の都合2回の調査を行っていき、入学年度ごとの活動体験や『地域』に対する関心や背景の違いや、在学期間中の学習・研究の積み重ねによる意欲・関心の推移の

把握をして、授業の内容・方法の改善に資すること」である。

立案時の設定と昨年度の検討（西島・大堀・鈴木・武田 2022）に基づき、2022年度の学生アンケートは、1年生に加えて4年生にも実施するかどうかを検討した。学生支援委員会も4年生対象に「卒業生アンケート」の実施を計画していることから、そのアンケートに連携して取り組む方向で検討を進め、本プロジェクト単独での4年生対象の学生アンケートの実施は見送ることとして、本プロジェクトとしては今年度も1年生のみに実施することとした。

以上をふまえて、今年度は、過去3年間と同じ目的と内容で実施することとした。アンケートの実施方法については、授業計画との関係から、後述のとおり、授業中に学生にアンケート用紙を配付し、学生は持ち帰って各自で回答を記入して、翌週の当該授業時に提出する「持ち帰り調査」で行うこととした。

その結果、第一に、今年度の学生アンケートの項目は、一昨年度の内容に戻した。具体的には、地理的知識を問う質問を削除して、①中学1年時と現在の居住地、②引っ越し経験、③小学校高学年から現在までのさまざまな活動体験、④中学時の通学と週末の外出のようす、⑤国内外への旅行の経験の5項目を尋ねることとした。第二に、アンケート用紙の配付を、「地域社会調査法入門（基礎調査）」の授業中に行った。この科目は8クラスに分かれて行っているが、そのうちの6クラスが12月1日に大教室で行う西島による講義に参加することになったので、その日に、6クラスには大教室で、残りの2クラスはそれぞれの教室で配付した。

*青山学院大学

**同上

***同上

****同上

西島による授業への出席率が低かったことや、アンケート用紙は受け取っていたが翌週の授業時に提出しなかった学生がいたことなどから、回収率は62.6%と、過去3回と比べて大幅に低かった。

1.2 学生アンケートの概要

アンケートは、以下の要領で実施した。なお、アンケート本体は、本稿末尾に掲載した。

- i. アンケート題目：「コミュニティ人間科学部学生の地域体験と知識に関するアンケート」
- ii. 対象者：コミュニティ人間科学部2022年度1年生全員
- iii. 実施時期：2022年12月1日～12月8日
「地域社会調査法入門（基礎調査）」の授業時間
- iv. 実施方法：アンケート用紙を授業中に配付して、持ち帰って各自で回答をし、次の授業時に提出する「持ち帰り調査」
- v. 回収数と回収率：161票、62.6%

2. 数量データ部分の記述的整理

本章では、数量データ部分の回答を記述的に整理していく。毎年度のアンケート結果を積み重ねていき、入学年度ごとの活動体験や「地域」に対する関心や背景の違いを把握して、授業の内容・方法の改善に資することが目的なので、過去3回のアンケート結果との比較を意識して、同じ項目を取り上げることとする。基本的には、単純集計結果を提示するが、いくつかの項目については、クロス分析結果も紹介することとする。

2.1 中学1年時の居住地

どのような「地域」でどのような人々に囲まれて幼少期から思春期を過ごしたかは、「地域」に対する関心のもち方に影響していると考えられる。そこで、学生の出身地の地域特性を把握するために、中学1年時の居住地を、都道府

県・区市町村レベルで尋ねた。

中学1年時の居住地を尋ねることにした理由については、「2019年度学生アンケート報告」に詳しいが、住所をある程度正確に覚えている年齢で、多くの場合に、保護者と同居していて、そこからそれほど遠くない学校に通っていて、生活圏がある程度の範囲に収まっている時期として、限定的に設定している。

まず、図表1と図表2から、居住地の都道府県別の分布をみてみよう。神奈川県が61人で、全体の4割弱を占めている。神奈川県に東京都と千葉県と埼玉県を合わせた南関東4都県では108人で全体の3分の2に、さらに北関東の3県を合わせると119人で全体の4分の3弱に上り、中学1年時の居住地でみれば、関東地方出身の学生が多くを占めている。中学1年時に南関東4都県に住んでいた学生が約7割、関東地方に住んでいた学生が約8割いた2019年度と2020年度から比べて、2021年度には関東地方に住んでいた学生が7割弱に減ったが、2022年度は再び7割強にまで増えている。

関東地方以外の道府県については、岩手県をはじめ16県には中学1年時に住んでいた学生がいない。とくに、石川県をはじめ6県には、中学1年時に住んでいた学生が過去4年間で1人もいない。中学1年時に近畿地方以西に住んでいた学生は、2019年度の19人、2020年度の20人、2021年度の20人と、その比率は大きくなってきていたが、2022年度は16人でその比率は小さくなった。

関東地方に住んでいた学生が再び多くなったことや近畿地方以西に住んでいた学生が再び少なくなったことについては、もう1～2年推移を見てみないと、2021年度の動向がコロナ禍による一時的なものだったのか、全体としては関東地方出身者が減る傾向にあるのか、判断するのは難しいだろう。

なお、今年度は、中学1年時に外国に住んでいた学生が1人いる。

続いて、図表3から、居住地の区市町村別

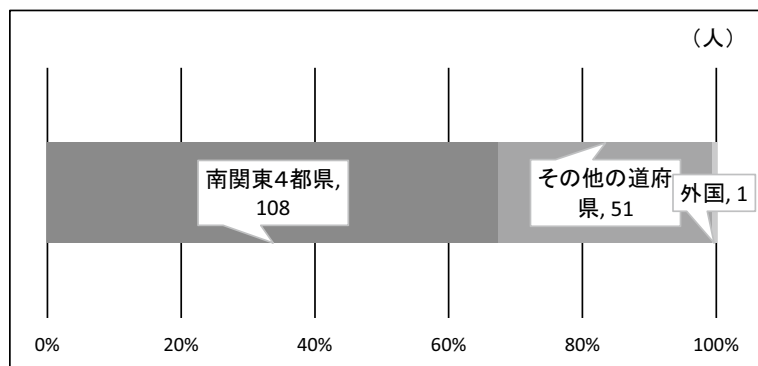
図表1 都道府県別にみた中学1年時の居住地 (人)

都道府県名	人数				都道府県名	人数				都道府県名	人数			
	22年度	21年度	20年度	19年度		22年度	21年度	20年度	19年度		22年度	21年度	20年度	19年度
北海道	1	4	1	1	石川	1	0	0	0	岡山	1	1	2	1
青森	1	1	1	1	福井	0	0	0	0	広島	2	2	3	3
岩手	0	0	2	1	山梨	0	2	2	1	山口	0	0	0	0
宮城	2	3	2	3	長野	3	6	1	4	徳島	0	0	0	1
秋田	2	0	0	1	岐阜	1	2	3	0	香川	1	0	0	1
山形	1	2	1	1	静岡	6	5	6	6	愛媛	1	0	1	0
福島	0	4	3	5	愛知	4	5	7	3	高知	0	0	0	0
茨城	4	5	4	9	三重	1	0	1	0	福岡	2	5	6	5
栃木	4	1	5	5	滋賀	1	0	0	0	佐賀	0	0	0	1
群馬	3	3	2	3	京都	1	0	1	1	長崎	2	1	0	0
埼玉	13	10	17	21	大阪	1	2	2	1	熊本	0	3	0	2
千葉	3	5	12	11	兵庫	1	2	2	1	大分	1	2	2	0
東京	31	33	32	51	奈良	1	0	0	0	宮崎	0	0	0	1
神奈川	61	65	104	89	和歌山	0	0	0	0	鹿児島	0	0	0	0
新潟	2	1	3	1	鳥取	0	1	0	0	沖縄	0	0	0	0
富山	0	0	1	1	島根	0	1	0	1	海外	1	3	0	2

注1 回答者数は、19年度が240人、20年度が229人、21年度が180人、22年度が161人。

注2 19年度と22年度は無回答が1人ずついる。

図表2 中学1年時の居住地南関東4都県とそれ以外に分類

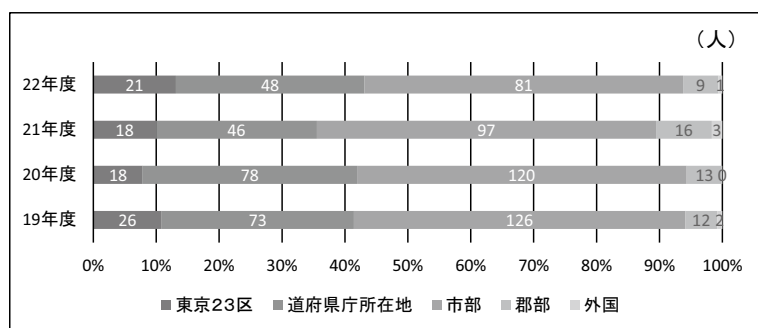


の分布をみてみよう。東京23区が21人、道府県庁所在地が48人、その他の市部が81人、郡部が9人である。昨年度と比べて、東京23区と道府県庁所在地に住んでいた学生が増えた一方で、市部と郡部に住んでいた学生が減っている。ただし、2019年度と2020年度と比べると、ほぼ同

じ比率の分布である。また、過去3年と同様に、東京23区と都道府県庁所在地とその他の市部に住んでいた学生で約9割を占めており、郡部に住んでいた学生が非常に少ないという傾向は変わっていない。

なお、中学1年時に横浜市に住んでいた学生

図表3 中学1年時の居住地区市町村別に分類



は27人(2021年度=28人、2020年度=48人、2019年度=42人)で、比率では昨年度より若干増えたが、2019年度と2020年度よりは少ない。キャンパスのある相模原市に住んでいた学生は3人(2021年度=5人、2020年度=9人、2019年度=3人)だった。

2.2 現在(大学1年時)の居住地

南関東4都県周辺以外の地域の出身者の多くは、大学に通うために、大学周辺の寮や下宿などに引っ越してきて住んでいると思われる。また、高校まで東京都や神奈川県に住んでいた場合でも、通学時間を考慮して大学周辺の寮や下宿などに住むようになった学生もいると予想される。反対に、東京都や神奈川県以外でも、実家から通っている学生もいるかもしれない。一人暮らしや寮生活の経験も、長距離通学の経験も、「地域」に対する関心のもち方に影響していると考えられる。そこで、学生の現在の居住地の地域特性や通学状況を把握するために、現在、つまり大学1年時の居住地を、都道府県・区市町村レベルで尋ねた。

図表4から、大学1年時の居住地をみてみよう。キャンパスのある相模原市に住んでいる学生が37人で4分の1弱を占める。この割合は過去3年とほとんど変わらない。中学2年生以降に家族で相模原市に移住してきた学生もいるだろうが、それを考慮しても、30人余度が大学に通うために相模原市に引っ越してきた

のではないだろうか。次に多いのが横浜市と神奈川県その他の市郡部の28人である。中学1年時に横浜市に住んでいた学生は27人で、神奈川県その他の市郡部に住んでいた学生は26人だったので、大学に通うために横浜市や神奈川県内のその他の市郡部に引っ越してきた学生はほとんどないようだ。一方、東京都市郡部に中学1年時に住んでいた学生は10人だったが、大学1年時には24人いることから、大学に通うために町田市などに引っ越してきた学生が一定数いることがうかがえる。

一昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大予防の観点から、年間を通してオンラインで授業が行われたため、実家で暮らしていたなどの理由で、東京都と神奈川県以外の県=その他の県に住んでいる学生が34人いた。しかし、対面授業が再開された昨年度は、その他の県に住んでいる学生は11人にまで減った。今年度その他の県に住んでいる学生は16人いるが、その全員が埼玉県、千葉県、静岡県で、その大半が中学1年時の居住地と同じだったので、自宅から通学していると想定される。

これまでの4年間は、コロナ禍の影響で、自宅に住んでいても寮生活や一人暮らしをしても、外出もままならない時期があった。今後、徐々に行動制限が緩んでいくことで、大学生になってからも自宅に住み、通学している学生と、実家を離れて寮生活や一人暮らしをして、通学している学生とでは、生活スタイルの違い

がはっきりしてくることだろう。居住形態別にどのような学生生活を送っていき、そのことが、学生時代の人間形成や社会関係資本の蓄積や本

学部での学びにどう影響することになるのか、ていねいに検証していく必要があるだろう。

図表4 大学1年時の居住地

地域	22年度		21年度		20年度		19年度	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
東京23区	22	13.8	18	10.0	21	9.2	30	12.7
東京都市郡部	24	15.1	32	17.8	26	11.4	41	17.3
神奈川県横浜市	28	17.6	32	17.8	50	21.8	47	19.8
神奈川県川崎市	4	2.5	16	8.9	12	5.2	13	5.5
神奈川県相模原市	37	23.3	45	25.0	53	23.1	54	22.8
神奈川県その他の市郡部	28	17.6	26	14.4	33	14.4	29	12.2
その他の県	16	10.1	11	6.1	34	14.8	23	9.7

注1 無回答等が19年度に3人、22年度に2人いる

2.3 引っ越し経験の有無

引っ越しをして、それまで住んでいた「地域」とは違う「地域」に住むようになると、それぞれの「地域」の良いところや悪いところが気になったり、共通点や相違点に気づいたりすることもあるだろう。それに対して、生まれてから一度も引っ越しをしたことがないと、自分が住んでいる「地域」の特性を相対化して捉える機会はあまりないかもしれない。そう考えると、引っ越し経験の有無は、「地域」に対する関心のもち方に影響している可能性がある。そこで、これまでの引っ越し経験の有無を、その回数で尋ねた。

図表5から、引っ越し回数をみてみよう。引っ越しをしたことがない（「0回」）学生が43人で4分の1余りいる。このうち39人は中学1年時に南関東4都県に住んでいた。一方で、中学1年時にはその他の道府県に住んでいながら「0回」と回答した学生が4人いて、1人は現在も同じ道府県市町村に住んでいるが、3人は現在東京都または神奈川県に住んでいる。つまり、大学に通うためのおそらく学生1人だけの引っ越しは、“引っ越し”と認識していないのだろう。「1回」引っ越しした経験がある学生が61人で4割弱、「2回」

引っ越しした経験がある学生が29人で2割弱と、1～2回の引っ越し経験のある学生が5割強に上った。また、「5～6回」と何度も引っ越しを経験した学生も5人いた。

図表5 引っ越し回数

回数	人数	(%)
0回	43	26.7
1回	61	37.9
2回	29	18.0
3回	13	8.1
4回	10	6.2
5～6回	5	3.1

（西島 央）

2.4 小学校高学年から現在までのさまざまな活動体験の様子

これまで住んでいた居住地で、どのような人々と関わってきたか、どのような場所で遊んできたか、どのような施設を利用してきたかといった活動体験の蓄積は、「地域」に対する関心の持ち方に影響していると考えられる。そこで、図表6のような12項目を挙げ、それぞれの活動体験について、小学校高学年、中学生、高校生、現在の4つの時期ごとにどのくらいしていたかを4点尺度で尋ねた（1. よくした、

図表6 各時期の活動体験を「よくした」割合＝体験率

時期	A. 地域のお祭りや行事に参加すること	B. 地域の子ども会活動に参加すること	C. 教会やお寺等の宗教施設にお参りすること	D. 山や海や川で遊ぶこと	E. 公園で遊ぶこと	F. 映画館に映画を見に行くこと
①小学校高学年	63.1	37.5	9.4	28.1	70.0	20.0
②中学生	25.0	3.1	7.5	11.3	15.0	30.6
③高校生	6.3	1.3	13.1	5.0	3.8	33.1
④現在	4.4	0.6	5.0	7.5	1.9	35.2

時期	G. 公民館に行くこと	H. 図書館に行くこと	I. 博物館や美術館に行くこと	J. 体育館や運動場に行くこと	K. スポーツ観戦に行くこと	L. コンサートや音楽フェスに行くこと
①小学校高学年	22.5	26.9	8.1	48.8	17.5	10.7
②中学生	7.5	15.6	3.8	45.6	16.9	14.5
③高校生	3.1	16.3	6.9	33.8	13.8	17.6
④現在	0.6	13.1	10.0	15.6	13.1	24.5

注 無回答を除いた有効回答を100%とした。

2. ときどきした、3. あまりしなかった、4. ほとんどしなかった)。活動体験の項目は昨年度までと同じものであり、①A～Cが家庭や地域での生活に関わる活動体験、②D～Fが家族や友達との余暇に関わる活動体験、③G～Jが社会教育施設使用に関わる活動体験、④K～Lがいわゆるエンターテインメントに関わる活動体験である。

図表6には、4つの時期ごとの12項目の活動体験について、「1. よくした」と回答した割合を体験率として示した。

主な特徴は以下の4点にまとめられる。

第1に、学校段階が上がるにしたがって多くの活動の体験率が下がっている。特に「A. 地域のお祭りや行事に参加すること」、「B. 地域の子ども会活動に参加すること」、「E. 公園で遊ぶこと」の3項目は小学校高学年から中学生にかけて30～55ポイント減少していた。この傾向は昨年度と同様のものである。

第2に、小学校高学年から中学生にかけて体験率が増加している項目が2つ見られた。具体的には「F. 映画館に映画を見に行くこと」、「L. コンサートや音楽フェスに行くこと」であり、4～10ポイント増加していた。これらの体験率の変化は、子ども映画や童謡などの子ども向けではない、一般的な映画や音楽への関

心が高まるのが中学生頃からだとすればもっともな結果といえよう。さらに、いずれも中学生よりも高校生、高校生よりも大学生になった現在の方が体験率が上がっていた。「F. 映画館に映画を見に行くこと」は家族や友達との余暇に関わる活動体験とカテゴライズしているが、「L. コンサートや音楽フェスに行くこと」と同じくエンターテインメントに関わる活動体験と捉えることもでき、大学生となった現在ではスポーツ系でないエンターテインメント活動である映画と音楽イベントが体験率の高い活動であるといえる。

第3に、小学校高学年に注目してみると、「A. 地域のお祭りや行事に参加すること」、「E. 公園で遊ぶこと」がおよそ60%以上の高い体験率であった一方、「C. 教会やお寺等の宗教施設にお参りすること」、「I. 博物館や美術館に行くこと」、の2項目の体験率は10%を下回っていた。

第4に、「C. 教会やお寺等の宗教施設にお参りすること」、「D. 山や海や川で遊ぶこと」、「J. 体育館や運動場に行くこと」の3項目は、昨年度に比べて体験率が10ポイント前後下がっていた。「C. 教会やお寺等の宗教施設にお参りすること」、「D. 山や海や川で遊ぶこと」は昨年の値が一昨年度より高めであったが、それ

より前の傾向とは同じであったことから、年度によって何か特徴的なことがなくても10ポイント程度の変動はあると考えられる。ただし、ほかの項目でここまで大きく変動するものはそれほど見られないので、なぜこれらの活動で変動が大きいのかは今後の変動も注視しながら考えていく必要があろう。

以上より、今年の学生の特徴をまとめると、①学校段階が上がると様々な活動の体験率は減少する傾向にある、②過年度と同様に、活動の種類によって体験率が大きく異なる、ということがいえる。このほか、今年度だけでなく数年分のデータが蓄積されてきたことから、活動の種類によって、年度による変動の大きさに違いがあることも示唆された。

次に、多くの活動の体験率が高かった小学校高学年に注目し、居住地別に体験率が違うかを検討した。図表7に、中学1年時の居住地別の、小学校高学年の段階での体験率をまとめた。ただし居住地情報は中学1年時点のものであるため、住んでいた時期と活動体験の時期には若干のずれがある。また、今年度の調査では郡部に住んでいた学生は10人以下であり、結果の読み取りには注意が必要である。

結果の主な特徴として、次の2点が挙げられる。

第1に、A～Eの地域や自然に関わる活動は、東京23区や道府県所在地よりも市部に住んでいた学生の方が体験率が高い傾向が見られた。一方で市部よりも自然が近いと考えられる郡部では、「B. 地域の子ども会活動に参加すること」、「D. 山や海や川で遊ぶこと」、「E. 公園で遊ぶこと」は道府県所在地よりも体験率が低かった。

第2に、F、H、I、Lの映画館、図書館、博物館や美術館、コンサートや音楽フェスといった、特定の設備を持つ施設へ行く活動の体験率について、昨年度は東京23区に住んでいた学生の方が高い傾向が見られたものの、今年度はそのような傾向が見られず、むしろHの図書館以外は市部や郡部よりも体験率が低かった。

先にも述べた通り郡部に住んでいた学生の数が少ないことや、調査年による揺らぎにすぎない可能性があることには留意しながら、引き続き継続的に調査結果を見ていく必要がある。

2.5 中学時の通学の様子

中学校への通学は、公立学校であっても小学

図表7 中学1年時の居住地区市町村別に見た小学校高学年の活動体験「よくした」の割合

	東京23区 (N=21)	道府県庁 所在地 (N=48)	市部 (N=81)	郡部 (N=9)
A. 地域のお祭や行事に参加すること	52.4	64.6	66.3	66.7
B. 地域の子ども会活動に参加すること	4.8	43.8	43.8	33.3
C. 教会やお寺等の宗教施設にお参りすること	9.5	6.3	11.3	11.1
D. 山や海や川で遊ぶこと	14.3	18.8	38.8	11.1
E. 公園で遊ぶこと	61.9	68.8	73.8	55.7
F. 映画館に映画を見に行くこと	9.5	14.6	25.0	33.3
G. 公民館に行くこと	9.5	16.7	28.8	33.3
H. 図書館に行くこと	28.6	22.9	27.5	44.4
I. 博物館や美術館に行くこと	4.8	4.2	12.5	44.4
J. 体育館や運動場に行くこと	42.9	43.8	51.3	66.7
K. スポーツ観戦に行くこと	28.6	14.6	16.3	22.2
L. コンサートや音楽フェスに行くこと	9.5	8.3	12.7	11.1

注1 無回答を除いた有効回答を100%とした。

注2 居住地が外国であった1名と無回答であった1名を除いた。

校より学区が広くなることや、社会科や理科等の学習の積み重ねがあることなどから、日々の生活の中で自分の住んでいる「地域」を相対化して捉える機会となりうる。そのため、中学校への通学は「地域」に対する関心の持ち方に影響していると考えられる。そこで、中学校への通学について、手段と時間の2点を尋ねた。

図表8に通学手段の回答結果を示した。公立学校が想定している一般的な通学手段である徒歩または自転車による通学者が約7割を占めていたが、バスや鉄道などの公共交通機関による通学も約2割いた。この傾向は昨年度と同様のものである。図表には示していないが、公共交通機関を使っているかどうかは居住地により差があり、東京23区で47.6%、道府県庁所在地で27.1%、市部で16.5%、郡部で0.0%であった。

図表8 中学校への通学手段

通学手段	人数	(%)
徒歩	98	61.6
自転車	17	10.7
バス	8	5.0
鉄道	28	17.6
乗用車	8	5.0

注 無回答=2

図表9には居住地別に見た中学校への平均通学時間を示した。数値は片道の時間である。いずれの地域も30分弱であったが、同じ30分弱

でも郡部は徒歩や自転車だけでこの時間であり、通学に費やす体力という点では地域による差が大きくあるように思われる。引き続き、居住地のほか公立校か私立校かといった点なども考慮に入れて、この傾向が安定して出てきているのかを判断する必要がある。

2.6 国内外への旅行の経験

中学校への通学が日常の中で自分の住んでいる「地域」を相対化する機会となりうるとしたら、旅行は、非日常として自分の住んでいる「地域」を相対化する機会となりうるだろう。その一方で、多少手段や時間は違っても全員に経験がある通学と異なり、旅行の経験は、経験の有無や頻度、行先などが人によって相当大きく異なっていると予想される。それだけに、旅行経験の有無とその多様な状況は、「地域」に対する関心の持ち方に影響していると考えられる。そこで、昨年度までに続き、家族での帰省や学校の修学旅行等を除いて、国内旅行と海外旅行のそれぞれについて、経験の有無と、経験がある場合は最も印象に残っている旅行の詳細を尋ねた。

国内旅行の経験がある学生は89.4%、海外旅行の経験がある学生は45.9%であり、昨年度および一昨年度と同程度であった。半数の学生が海外旅行経験を持つ一方で、国内旅行の経験を持たない学生もあり、旅行経験には大きなばらつきがあった。

図表9 区市町村別中学校への平均通学時間（分）

中学1年時の居住地 (2022年度の度数)	2022年度	(参考) 2021年度	(参考) 2020年度	(参考) 2019年度
東京23区 (N=21)	27.4	27.6	33.0	33.1
道府県庁所在地 (N=48)	29.4	37.6	31.9	23.3
市部 (N=80)	22.4	24.5	27.1	24.3
郡部 (N=9)	29.4	19.7	24.1	33.3
全体 (N=160)	25.6	28.1	29.0	25.4

注 「全体」には居住地が外国と無回答の計2名を含む。

国内・海外を問わず最も印象に残っている旅行を1つ選ばせ、その旅行について、行った時期、旅行先、同行者を尋ねた。結果はそれぞれ図表10、11、12に示した。

図表10 最も印象に残っている旅行に行った時期

時期	人数	(%)
小学校入学前	2	1.4
小学校低学年	19	13.5
小学校高学年	31	22.0
小学生（学年不明）	3	2.1
中学生	44	31.2
高校生	33	23.4
大学生	9	6.4

注 非該当=17、無回答=3

最も印象に残っている旅行に行った時期について、小学校時代全体では37.6%であったが、低学年と高学年に分けるとそれぞれ13.5%と22.0%であった。中学時代は31.2%、高校時代は23.4%であり、小学校を低学年と高学年の3年間で区切って考えると、中学時代に行った旅行が最も印象に残っていると答えている者が多かった。高校時代の旅行が印象的との回答が最も多かった昨年度までとは異なる傾向であった。大学時代を挙げる回答が少なかったのは、

2020年度に比べれば制限は弱まってきたものの、引き続き新型コロナウイルス感染症のためにそもそも旅行に行けていないことが要因の少なくとも1つであろう。

最も印象に残った旅行の旅行先は、国内旅行先という回答が7割を占めており、昨年度よりも1割ほど高くなっていた。北海道、関東、近畿など、旅行先にはばらつきがあるが、昨年度と同じく東北地方、中国地方、四国地方は選択者が少なかった。海外旅行経験があったとした73名を全体として考えると、海外旅行を最も印象に残った旅行として選んだのはそのうちの56.1%にあたる41名であった、海外旅行は国内とは大きく異なる文化に触れることや、日数や費用なども国内旅行より規模が大きいことから、印象に残りやすいと考えられるが、昨年に比べてそのような傾向は明確には見られないようである。旅行先を見ると、昨年は3～4人が挙げていた韓国と台湾が今年度はいずれも0人であり、このほかにも中国やタイを含む東アジアを挙げた者がいないことが、こうした傾向と関連する可能性もある。そもそもこれらの地域に旅行したことがないのか、したが最も印象に残ったわけではないのかは本アンケートの結果から判断することはできないが、旅行先

図表11 最も印象に残っている旅行の旅行先

旅行先（国内）	人数	(%)	旅行先（外国）	人数	(%)
北海道	19	13.5	中国	0	0.0
東北	2	1.4	韓国	0	0.0
関東	17	12.1	タイ	0	0.0
中部	24	17.0	台湾	0	0.0
近畿	11	7.8	香港	1	0.7
中国	1	0.7	シンガポール	2	1.4
四国	2	1.4	その他アジア	5	3.5
九州	5	3.5	米国	5	3.5
沖縄	15	10.6	ハワイ・グアム・サイパン	21	14.9
その他国内	4	2.8	その他アメリカ	3	2.1
			ヨーロッパ	1	0.7
			オセアニア	3	2.1
			アフリカ	0	0.0

注 非該当=17、無回答=3

図表12 旅行に行った時期別にみた同行者（％）

	小学生以下（N=55）	中学生（N=44）	高校生（N=33）	大学生（N=9）
家族	92.7	88.6	45.5	25.0
友達	0.0	6.8	39.4	62.5
一人	0.0	2.3	9.1	0.0
その他	7.3	2.3	6.1	12.5

の印象を決める要因については必ずしも規模の大きさだけではないようである。

旅行の同行者は、年代によって異なることが考えられる。中学生以下では一人（同行者なし）の旅行をする機会はかなり少ないと思われる。一方で、高校生以上になると家族でなく友だちと旅行に行く機会が増えるであろう。図表12を見ると、中学生でも一人で旅行をしたという回答があった。また、高校では友だちという回答よりも家族という回答の方が多かった。この結果はあくまで「最も印象に残った旅行」の同行者であり、旅行体験全体のうちそれぞれの同行者との旅行がどれくらいあるのかは本アンケートから把握することはできないが、大まかな傾向としては発達に伴う重要な他者の変遷とも一致するといえよう。

（武田 美亜）

3. 自由回答記述欄にみる特徴的記述

3.1 3年間の記述量の変化

まず自由回答の記述量を見る。記述量には、調査の実施方法の違いによる影響があらわれると考えられる。そこでこれまでの実施方法を整理しておく、2019年度は授業内で実施し、回答は手書きであった。2020年度はオンラインで実施したこと、回答まで日数があり、また回答にはコンピュータが用いられた。2021年度は2019年度と同様である。今年度（2022年度）は、授業中にアンケート用紙を配付し後日回収する形をとり、回答まで日数があった。また手書きによる回答である。

問2のC「あなたが中学1年生の時に住んでいたところのお国自慢を自由に書いてくださ

い」に対する記述量は、2019年度：46.2字→2020年度：90.0字→2021年度38.3字→2022年度40.6字であった（小数点第2位を繰り上げ、以下同様）。問5の②のe、（国内、海外どちらでも）旅行経験のなかで最も印象に残っていることへの回答は、2019年度：52.3字→2020年度：66.2字→2021年度：41.8字→2022年度：58.1字となった¹。

3.2 中学1年時の居住地域についての「お国自慢」

問2のC（中一時居住地のお国自慢）に対する回答は、これまでと同様の傾向を示している。すなわち、地域の自然、食べ物、施設（たとえば著名な商業施設）、出身人物などについての記述が多い。ここには治安や交通の便についての言及も含まれる。多くの場合は、以下のように複数の要素を組み合わせた記述となっている。

- 工業・漁業が盛んで、港が有名
ホッキ貝が採れるので、給食にホッキカレーがでる スケートやホッケーがさかんで、小学校の冬の体育はスケート 学校に先生達がスケートリンクをつくってくれる

例年通り少数ながら、以下のような地域内の人間関係等について記述していたものもあった。157の有効回答のうち、14件を該当するものと判断した。

- 日本の〇〇県〇〇市で生まれたときから今まで19年間住み続けていま

す。学校の登下校のときには、地域の方たちがパトロールでお見送りをしてくれたりなど、あたたかい場所だと感じています。

- 〇〇〇といえば、「程良い田舎」という言葉に限ると思います。電車はどの駅でも大体10～15分に1本、海が近い、山も近い、畑もたくさんありおいしい〇〇野菜が採れます。(海鮮もいける)私の住む町(〇〇市〇〇町)は特に、人と人との結びつきが強いと思います。ほとんどの人が何十年も何代にも渡って住んでいるので「～の孫です」と言えば大体通じます。少し町を歩けば、「何年生になったの？」と毎日声を掛けられます。宅急便の人何人も何年も担当が同じなので、それぞれ家を把握していることも特徴だと思います。

該当と判断した14件の中には、上掲のような比較的詳細な記述以外にも、「人がやさしい」「親切な人が多い」なども含めている。一方、「治安がいい」「落とし物が届く」などの主旨のものは含めていない。

なお、昨年度は地域行政の施策や方針等に言及した回答がごく少数あったが、今年度は該当と判断できる記述はなかった。ただし「環境都市」など自治体のキャッチフレーズあるいはスローガンと推測できる表現を記述しているものが1件あった。

他に、図書館に言及したものは0件(2021年度1件、2020年度：4件)、博物館に言及したものは昨年度に続き0件(2020年度：2件)であった。美術館は、有名アニメーションスタジオ関連のものをあげている回答が1件あった。公園に言及しているものは13件(2021年度：15件、2020年度：34件)、公民館への言及が1件あった²。

(大堀 研)

3.3 最も印象に残っている旅行について

問5の②のe(国内、海外ともに印象的な旅行経験)については、過去3カ年の回答と同じく、多くの学生が旅行の楽しい思い出(トラブルや失敗を含む)を回答していた。大別すると訪問した土地にまつわることで、同行者とともに過ごす時間(一人旅の場合は一人で過ごす時間)を楽しんだことに分けられる。前者については、はじめて訪れた土地の自然・風景、あるいは文化に感銘を受けたことや、その土地の食事のおいしさ、そこでしか体験できないようなアクティビティ(マリンスポーツやスキー、現地の人との交流など)を経験したことなどであり、後者については家族や友人と共に過ごし体験を共有した楽しさや、旅行の計画を友人と一緒に立てたことなどである。

自文化ではあまり見かけない事象に接することそれ自体が貴重な経験ではあるが、知識としては知っていてもその土地に行ってはじめて実感を伴うことができるのも、旅行が与えてくれる貴重な経験である。

- モントリオールに住んでいる従兄弟と会い、ゲイヴィレッジという、ゲイの方々のためにつくられた地域を訪れた時のことが印象に残っています。ゲイしか入れないジムやカフェなどが林立していて、日本には無い雰囲気を醸しだしていたので、とても新鮮でした。
- 福井県→電車の本数が少ないので、しっかり計画を立てなければならなかったと思った。
- 接客の違い。アメリカでは店員と客が対等な関係だと感じました。
- ニューヨークで9.11のミュージアムに行き、自分が生まれていない年だけれど多くの人が亡くなったテロの事故、当事の様子を見て衝撃だった。

海外旅行は基本的に言葉が通じないという事も含めて非日常的で貴重な経験であり、自己の経験や思考を見直すきっかけとなりうる。

- 10年以上前なので覚えていることや思い出せることは少ないですが、異文化体験ができたことが1番印象に残っている。母語が通じない環境にいることは、自分にとってもストレスになってしまう部分もあって正直早く日本に帰りたいと思っていたが、英語を話せたらもっと世界が広がるんだと小学生ながら感じたし、様々な文化や環境の中で人は暮らしていることを学んだ。帰ってきてから、またいつか行きたいと思い続けて今になり、来年の春に行くことができそうなので10年前の経験も活かして、スキルアップさせてたくさん学んできたい。

- 滞在中1度もスマホが使えず、雨季で洗濯物もかわかない、お風呂もないという状況下でも、フィリピンの子どもたちが「満面の笑みで、話しかけてくれた」これだけで私も幸せな気持ちでいっぱいになれた経験は今後もずっと忘れないと思います。

もちろん国内旅行であっても旅行が契機となって自己の可能性を広げることにつながる。

- 宇治市源氏物語ミュージアムで源氏物語宇治十帖「浮舟」の帖を題材とした人形による映画を観て深く感動したことをきっかけに、源氏物語に興味をもち、「浮舟」をテーマに「玉の緒」というピアノ曲を作曲しました。

ここで取り上げた学生の意見はどれも貴重な意見であり、また取り上げてはいないが「～がおいしかった」「～が楽しかった」などの素直で素朴な意見もそれ自体価値あるものである。その上で、コミュニティ人間科学部の学びという観点からは、学生の活動体験をどのように学生の学びやコミュニティに接続させていくかが重要であろう。本学部では3年生になると「地域実習2」を履修し、学生はさまざまな地域・施設におもむき実習を行うが、そこで学生はいろいろな経験をすることになる。単にこういう経験をして楽しかった、おもしろかったで終わらせないためには、主観的な印象を対象化し、反省的に取り扱うことができるスキルを身につける必要がある。そうすることによって学生の学びは深化し次の段階へとつながっていくと考えられるが、それらを可能にする学びを学部として提供する方法を不断に検討しなければならないと思われる。

(鈴木 俊之)

(注)

- 1 問2のCは、無効回答として、無回答(19年度3件、20年度3件、21年度1件、②22年度4件)、「特になし」等(19年度2件、20年度1件、21年度4件)、「思いつかない」(20年度1件)をカウントした。無回答以外を無効回答とすべきかどうかは検討の余地があるだろう。問5の②のeについては、無回答のみを無効回答とした。19年度9件、20年度12件、21年度5件、22年度22件である。
- 2 データファイルを「図書館」「博物館」「公園」「公民館」で検索した場合のヒット数。

(文献)

西島央・大堀研・伊藤真木子 2020 「2019年度学生アンケート報告 — 1年生対象『コミュニティ人間科学部学生の地域体験と知

識に関するアンケート』の分析結果—」『青山学院大学コミュニティ活動研究所報』創刊号 pp.43-59。

西島央・大堀研・伊藤真木子 2021 「2020年度学生アンケート報告 — 1 年生対象『コミュニティ人間科学部学生の地域体験と知識に関するアンケート』の分析結果—」『青山学院大学コミュニティ活動研究所報』第 2 号 pp.51-68。

西島央・大堀研・鈴木俊之・武田美亜 2022 「2021年度学生アンケート報告 — 1 年生対象『コミュニティ人間科学部学生の地域体験と知識に関するアンケート』の分析結果—」『青山学院大学コミュニティ活動研究所報』第 3 号 pp.41-57。

2022年12月

コミュニティ人間科学部学生の地域体験と知識に関するアンケート

コミュニティ人間科学部附置研究所

～アンケート協力のお願ひ～

このアンケートは、コミュニティ人間科学部所属学生のみさんの、これまでの地域体験についてうかがうことで、これからの学習内容と指導方針の改善に活かすことを目的にしています。趣旨をご理解いただき、ご協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。なお、パネル調査のため、学生番号・クラス番号を書いていただきますが、テストではありませんので、なんらかの評価に影響することはありません。

<1>はじめに、あなた自身のことを答えてください。

- A. 学生番号 _____
- B. クラス番号 _____

<2>あなたが今まで住んできたところについてうかがいます。

①あなたが、中学1年生の時に住んでいたところと、現在住んでいるところの住所（都道府県・市区町村まで、政令市は区まで）を書いてください。

時期	住所(都道府県・市区町村まで)		
①中学1年生	都・道 府・県	市・区 町・村	区
②現在	都・道 府・県	市・区 町・村	区

※横浜市、相模原市など政令市の場合は、区まで書いてください

②あなたは、いままでに何回引っ越しを経験しましたか。その回数を書いてください。
引っ越しをしたことがない人は、「0」回と記入してください。

 回

③あなたが中学1年生の時に住んでいたところのお国自慢を自由に書いてください。

1. よくした 2. ときどきした 3. あまりしなかった 4. ほとんどしなかった

時期	G.公民館に行くこと	H.図書館に行くこと	I.博物館や美術館に行くこと	J.体育館や運動場に行くこと	K.スポーツ観戦に行くこと	L.コンサートや音楽フェスに行くこと
①小学校高学年						
②中学生						
③高校生						
④現在						

1. 徒歩 2. 自転車 3. バス 4. 鉄道
5. 乗用車 6. その他（具体的に： ）

時間 分

2022 年 12 月

(2) あなたは、学校の行事や部活動のない週末に、出かけることがありましたか。あれば、よく出かけたところについて、①誰と、②どこへ、③どんな移動手段で、④どのくらいの時間をかけて出かけて、⑤どんなことをよくしたか、この5項目が入るように、自由に書いてください。もし複数箇所が思い当たったら、複数について書いていただいてもかまいません。

--

＜5＞あなたの旅行の経験についてうかがいます。

①あなたは、家族での帰省や学校の修学旅行等とは別に、以下の宿泊を伴う旅行をしたことがありますか。A. B. それぞれについてあてはまる番号に○をつけてください。

- A. 国内旅行 1. ある 2. ない
B. 海外旅行 1. ある 2. ない

※いずれかで「1. ある」を選んだ人は②にも回答してください。

両方とも [2. ない] を選んだ人は、アンケートはこれで終わりです。

②A. B. のいずれかで「1. ある」を選んだ人にうかがいます。

あなたのこれまでの旅行の中で、最も印象に残っている旅行についてうかがいます。

a. その旅行に行った時期はいつですか。覚えている範囲でかまわないので、「9歳の時」や「中学1年生の時」のように、年齢や学年を数字で書いてください。

b. その旅行には誰と行きましたか。あてはまる番号に一つだけ○をつけてください。

1. 家族 2. 友だち 3. 一人
4. その他（具体的に： _____）

c. その旅行ではどこに行きましたか。具体的な行き先を()内に記入してください。

1. 飛行機 2. 船 3. 鉄道 4. バス
5. 乗用車 6. その他（具体的に： ）

--

59